

彙報

相愛大学総合研究センター研究プロジェクト活動報告

相愛大学総合研究センターでは、学内の様々な分野の教員の専門的知識を活用し、相互の交流を活性化することを目的に、共同研究プロジェクトを実施している。平成24年度からの3年間は「日本における諸学問の近代史」をテーマに共同研究を行い、近代の学問が西洋の学問の移入から始まり、固有の問題と取り組みながら自立してゆく過程を確かめてきた。だが、西洋文化の衝撃を受け止め、近代化への対応を迫られたのは学問の領域に限らない。そこで、今年度は「日本の近代－模倣と創造－」をテーマとし、学問に限定せず、近代日本の文化が確立する過程を多面的に明らかにすることを意図し、いわゆる学問の枠にとらわれない発表も得ることができた。

研究会は学内の教員を主要なメンバーとして学外からの講師も招聘し、学内外から参加者を募った。その成果の大部分を年度末の公開講座で紹介する予定であるが、第1回から第5回までの研究会の概要を報告する。

第1回

報告者：千葉真也

(相愛大学共通教育センター教授)

テーマ：『らいさん』－山田耕筈の最初の仏教讃歌

日時：2015年7月30日(木)

午後1時20分～午後2時50分

場所：相愛大学図書館 視聴覚室

参加者：17名

相愛大学図書館に「仏教音楽コレクション・A」が収められている。善興寺前住職である飛鳥寛栗氏から寄贈されたものである。飛鳥氏

は、西洋音楽の影響を受けた近代仏教音楽に関する膨大な資料を収集し、『仏教音楽事典』(共著)、『日本仏教洋楽資料年表』、『それは仏教唱歌から始まった』などの著書がある。「仏教音楽コレクション・A」は、飛鳥氏の収集した楽譜、図書、音楽関係団体の会報などの資料類、CD、カセットテープなどの音源その他からなる。簡単な目録が福本康之氏によって作成されている。

本コレクションには、初期の讃仏歌、仏教音楽協会の「仏教聖歌」、仏教系の教育施設等で使用する童謡、カンタータ(交声曲)、など種々の資料が含まれている。

今回は、山田耕筈の最初の仏教讃歌(山田の言い方では「仏教聖歌」)である『らいさん』について紹介した。

1917年、渡米の船中で発病した山田耕筈は、ホノルルに滞在した。そこには東京音楽学校で山田の教えを受けた澤康雄がいた。本願寺の日曜学校に関わっていた澤は主事の小谷徳水と相談し、山田に作曲を依頼する。山田にとって仏教に関わる作曲の最初のものであった。歌詞の多くは小谷徳水の作であるが、親鸞上人の和讃によるものが2曲ある。その一つ「恩徳讃」(旧譜)は今も歌われている。『らいさん』は、大正7年(1918)7月本願寺ハワイ別院文書部から出版された。作曲者は澤康雄と山田耕筈。作詞者は小谷徳水他。大正15年(1926)以後、国内でも版を改めて出版された。本コレクションには、①1918年の原本の複製、②小谷徳水を中心とする「らいさん刊行会」が出版した「らいさん」、③澤康雄を編纂主任として東京の千代田女学園から出版された『礼讃歌集』など

が収められている。それらを比較することで、1918年に生まれた『らいさん』の変容・成長を知ることができるのである。

これらを対照すると、収録曲目に違いがあり、作曲者・作詞者に関わる表示の仕方も異なる。個々の作品についても、誤植の訂正にとどまらず、大幅な改変の行われているものもある。今回は、その具体的な例として、「摂取と光明」と「さよなら」と紹介した。また、②③で増補された「誓願」が、ドイツ学生歌“Wir hatten gebaut ein stattliches Haus”をもとにしている可能性を指摘した。

第2回

報告者：嘉戸一将（龍谷大学文学部准教授）

テーマ：主権論争について－主権概念受容の
一コマ

日 時：2015年9月17日（木）

午後1時20分～午後2時50分

場 所：相愛大学図書館 視聴覚室

参加者：7名

一般に、国家の独立性や、国家の意思を最終的に決定する権力を表示する概念として、現代の日本ではすでに定着している主権概念は、近代国家建設の一環として明治期に西洋から受容された。元来、ユダヤ＝キリスト教という一神教における神の絶対性と超越性を意味するこの概念は、近年では、全能性を標榜する暴力的な観念を包含するとして批判にさらされているが、ローマ教皇グレゴリウス七世による「グレゴリウス改革」に由来するこの概念の歴史を踏まえるなら、主権概念は神によって課された人としての職務を意味する規範的次元を有しており、必ずしも全能の主権者という観念に収斂するものではない。ところで、極めて一神教的なこの概念は、非一神教的な文化圏に属すると言

って良い日本において、どのように受容されたのか。

主権概念受容に際して論争が繰り広げられた（一八八一～一八八二年）。当初、君主主権論と人民主権論、そしてフランソワ・ギゾーの理性主権論が提唱され、やがて制定される憲法の理念の座をめぐる論争が展開されたが、理性主権論はその抽象性のために後景に退く。それとともに、法の正統性や理性による権力の拘束に対する関心が希薄化し、論争は誰が主権者かをめぐる議論へと収斂することになる。つまり、論争は一神教的な観念を受容する思想レベルでの争いから、単なる政争へと様相を変え、自由民権運動への弾圧強化とともに終息する。しかし、ここから政府は主権概念の受容と普及を図った。すなわち、トマス・ホプズやジョゼフ・ドゥ・メーストルらの主権論が、政府によって翻訳され出版されたのである。つまり政府は、一神教的な決断主義の主権論を受容しようと試みたと言える。

しかし現実には、明治憲法に主権概念は盛り込まれず、統治権へと変容した。統治権とは、井上毅によると理性による支配であり、この起草者の意図は天皇機関説論争では忘却されるが、一九三〇年代には哲学者や法学者によって再発見され、主権の非実体的観念を表現するものとして再定義された。つまり、主権論から主権者が排除されることで、統治権としての主権は、一方で全能者なき法秩序の理念として構想され、他方で権力を理性に繋縛する理念としてフォーミュレートされたのである。主権論の非一神教的な錬成が、法秩序の定礎としての主権概念の規範的次元の純化をもたらしたと言えるだろう。

第3回

報告者：呉谷充利（相愛大学人文学部教授）

テーマ：今、文学と科学について－志賀直哉の
「不安焦慮」から湯川秀樹「深山木」
へ－

日 時：2015年10月29日（木）

午後1時20分～午後2時50分

場 所：相愛大学図書館 視聴覚室

参加者：6名

今日の科学にみる文明の発達は、一言でいえば学の分化によってもたらされている。近代のこの文明の発達の土台といえるものを築いたのが西欧におけるルネサンスである。人間は自らの眼をもって世界を見る。考案された絵画の遠近法はこのことを明瞭にしている。ルネサンスは新たな人間像である「万能人」-“Uomo Universale”-を生む。万能人たるレオナルド・ダ・ヴィンチは、絵画の目的は肉体を通じた魂の表現であるという。この天才による肉体の科学的観察は人間の魂に届く。かれは、魂にみる人間の普遍性と科学の両立という至難のわざを自らに課したのである。

バルダザレ・カスティリオーネは『宮廷人』（邦訳あり）を著している。ルネサンスにおけるその宮廷の理念は“grazia”（優美、共感、恩恵、慈悲の意味）に現わされる。それは、専門家でない本来の意味におけるアマチュア精神であり、また真に調和した自我においてのみ実現される。『宮廷人』の舞台であるフェデリゴ・モンテフェルトロの「ウルビーノ宮廷」においてサロンのこの優美な精神が育まれる。

ルネサンス・イタリアに見るこの社交精神は17世紀フランスのサロンに引き継がれる。サロンに出入りしたパスカルは「〈かれは数学者だ〉とか〈説教者だ〉とかいわれないで〈かれ

は真人間-“l’honnête homme”-だ〉と言われるようではなければならない。わたしはこの普遍的な性質-qualité universelle-だけを好む」という。（パスカル瞑想録（パンセ））

人間の根本にみるこうした心情は無論西欧だけのものではない。懐徳堂初代学主三宅石庵は記念講演（享保2年1726）において「本心にて物のあわれを知るが仁なり、物のわかちを知るが義なり。」と述べている。そこにおける仁は“grazia”に通じるものをもつ。

明治日本における西洋文明の導入は富国強兵という国家目的をもった。そこにあったものはルネサンスなき、市民革命なき西洋文明の移植である。とすれば科学の専門性と人間の普遍性という根本の問題は近代の日本においてどのように捉えられたのであろうか。森鷗外は「妄想」のなかでけっして表舞台に現われない本当の自分をいい、夏目漱石は本当の自分に立ちただかる他者について述べ、永井荷風は本統の文明を語る。時代を少し下って、志賀直哉は目を見張る文明の発達を前に自身に生じる「逆落としの不安」を吐露している。

ところで、湯川秀樹は「長岡半太郎の休学」に東亜（東アジア）における科学的精神を見て、その非凡さを語る。湯川が長岡と共有した東亜の一精神性がある。荘子の思索である。その思索を一言で表わせば、物心つまり心身の一元である。「胡蝶の夢」はこのことを語っている。西欧は物心つまり心身の二元論に立つ。東亜はそれにたいしてその一元をいう。

こうした物心、あるいは心身の問題は近代日本における自我の問題に返る。西欧から東亜（東アジア）への回帰である。志賀直哉にみる、ロダンの「考える人」から法隆寺の「救世観音」への美的回帰は心身の一元に戻る自我の問題としてもまた存在したのである。

日本の近代は西洋文明の導入と裏腹にその深部においてむしろ東亜の知の深化といえるものを一様に経験していた。その知は今西洋文明への一警鐘として響きさえる。

参考文献

- ブルクハルト『イタリア ルネサンスの文化』中央公論社 1995
- 下村寅太郎『ルネッサンス的人間像—ウルピーノ宮廷をめぐる—』岩波新書 1975
- パスカル瞑想録（パンセ）由紀康訳 白水社 1976
- 『りずむ』第四号 —生のかたち— 所収 拙稿「文学と科学」白樺サロンの会 平成27年

第4回

報告者：大谷紀美子

（相愛学園学園長 音楽学部客員教授）

テーマ：賀来琢磨と仏教保育舞踊

日時：2015年11月26日（木）

午後1時20分～午後2時50分

場所：相愛大学図書館 視聴覚室

参加者：19名

飛鳥寛栗氏より寄贈された「仏教音楽コレクションA」のなかに『仏教童謡曲譜と遊戯』や『新纂仏教幼稚園唱歌遊戯』などがある。これらは子ども向けの仏教讃歌集で、昭和初期に日本仏教童謡協会から出版された。当然、これらの歌は西洋音楽の語法で作曲され、五線譜でしるされている。多くの歌には振り付けが添えられており、子どもたちが歌いながら踊ることを想定している。振り付けのほとんどは言葉で説明され、ところどころ挿絵が添えられている。これらの振り付けは賀来琢磨（1906-1975）によるものである。

我が国に、1872（明治5）年学制がしかれ、学校教育は西洋を手本として始まった。音楽教育は伊澤修二やメーソンなどにより開発されていった。1874（明治7）年に東京女子師範学校（お茶の水女子大学の前身）が創設され、その2年後に師範学校敷地内に幼稚園が開設された。明治政府はフレーベル（1782-1852）の幼稚園教育に注目し、フレーベル主義を範として日本にも幼児教育をすすめることとなった。フレーベルの基本思想には「唱歌と遊戯を同時に行うことは、子どもの精神と身体の発達にとって重要である」というのがあり、日本の幼稚園においても「唱歌遊戯」つまり歌をうたいながら遊戯をすることが行われるようになった。そして、仏教保育舞踊はこれらの伝統につながるものであると思われる。

賀来琢磨は大分県宇佐郡で生まれ、幼くして両親を亡くしたため、佐世保の曹洞宗の寺院に弟と二人あずけられた。1924年東洋大学に入学、駒込の吉祥寺に下宿をする。吉祥寺には日曜学校があり、仏教教育研究会の児童文化研究者が集まっていた。その中には作曲家の弘田龍太郎や舞踊家の金牧季雄などがいた。賀来は金牧に舞踊を学び、大学を中退し、舞踊に専念する。

賀来の舞踊理念は幼い頃に亡くなった母親への思い、幼少期に預けられた寺院での生活、そして吉祥寺の仏教教育研究会の経験が基本となっている。（十億のひとに）という暁鳥敏作の詞に彼自身が作曲、振り付けした作品が彼の原点といえるであろう。

第5回

報告者：宮谷秀一

（相愛大学人間発達学部教授）

テーマ：生命を動かすチカラ

日 時：2016年1月28日（木）

午後1時20分～午後2時50分

場 所：相愛大学図書館 視聴覚室

参加者：17名

古代人は食べ物に命の源であることは理解していたが、生命を動かすチカラが何であるかを明らかにすることは当時の科学知識では無理であった。しかし古代人は想像力を働かせそのチカラを精気や燃素、熱素などと定義づけて理解しようとしてきた。今日ではこれらのチカラはエネルギーとして説明されるが、やはり理解しにくいもので、熱エネルギーの単位を国際単位系のジュールで示すことを国際条約で決めた現代でも、熱エネルギーの単位は温度条件で変化する「カロリー単位」の使用が認められている。

ヒトが食物から取り入れたエネルギーのうち、身体活動に使う割合は25%程度で75%以上は代謝に利用した後、体熱となり最終的に環境中に放出される。人の適正食物摂取量を決める際に最初に決定すべきものはエネルギー量である。エネルギー摂取量は適正量より多いと太り、少ないと痩せたり生命維持に必要な栄養素が確保できなくなる。エネルギー必要量の個人差は大変大きい。たんぱく質、脂質、炭水化物はいずれもエネルギー源となるが、ヒトの体は場合によってこれらのエネルギー源の利用割合を変化させる。たとえば絶食時には体脂肪が主

に利用され、外科手術のような侵襲時には体たんぱく質の利用が高まる。それ故、外科手術後には体たんぱく質の燃焼損失を抑制するため、体内での利用がされやすい中鎖脂肪酸が投与されることがある。近年、血糖値の上昇を起こす糖質の摂取を制限し、脂質を多く摂取することにより、ケトン体を増加させてアルツハイマー症状の軽減や妊娠糖尿病の改善が見られたといった報告がある。また、高濃度の血糖は体内のたんぱく質と化学反応を起こし、生体に有害な物質を生むことも本当である。確かに極端な食べ方が治療に有効な場合はある。しかし、血糖は脳における長期記憶に必要であるという報告もあり、一般の人には栄養素バランスのとれた食事が勧められる。ところで、忘れてはならないのが消化管内に飼っている微生物たちへのエネルギー供給である。これらの微生物は食物に含まれる難消化性物質をエネルギー源として利用して生活し、短鎖脂肪酸を排出する。ヒトの大腸上皮細胞はこの短鎖脂肪酸をエネルギーとして増殖するため、この短鎖脂肪酸なしでは大腸の健康は保たれない。このように命を生み、命を維持し、命を動かすチカラ、それは食物に含まれるたんぱく質・脂質・炭水化物である。どの栄養素もヒトの役に立っており、良いも悪いも食べ方次第。結局、摂取の量とバランスが大事である。